

ムーソルグスキイの歌曲における デクラメーション様式

菊池 可奈子

(2009年10月6日受理)

Declamation in Mussorgsky's Songs

Kanako Kikuchi

Abstract: This paper discusses the declamation of Mussorgsky's songs. Mussorgsky faithfully duplicated the intonation of Russian language for his music. I selected his 10 songs, and then compared the actual speech with those songs, at the point of those pitch and rhythm. I worked out the percentage which shows how close the song is to its speech, on the result of comparison. Those 10 songs selected from the initial, middle and last period of Mussorgsky's life. Then, I viewed changes in the declamation of Mussorgsky, by my experiment. The results of comparison, the degree of agreement on pitch between the speech and its song was higher and higher in process of time. However, the degree of agreement on rhythm wasn't so. In the middle period, the degree became higher, and in the last period, it became lower. In short, the aspect of Mussorgsky's declamation differs in a pitch and rhythm. Moreover, his declamation has different styles by a form of lyric - a verse or a prose.

Key words: Mussorgsky, declamation, song

キーワード：ムーソルグスキイ、デクラメーション様式、歌曲

1. はじめに

ムーソルグスキイは生涯にわたって、ロシア語の話し言葉の抑揚を彼の声楽作品に反映させていた。その彼のデクラメーション様式の諸相を、実際の朗読と比較することによって明らかにしようとしたのが筆者の修士論文である。今回はその修士論文をもとに、ムーソルグスキイのデクラメーション様式確立の変遷を、実験によって得た数値から追うことにしたい。

本稿では便宜上、歌曲や話し言葉の音程の上がり下がりについて「音高関係」と名付け、音高関係やリズムの、歌曲と話し言葉との一致の度合いは「一致度」と呼ぶこととする。

2. 比較対象とする歌曲の分析

ムーソルグスキイの歌曲について考察する前に、他の作曲家の歌曲について朗読との比較を行い、まず一般的な歌曲の特徴を明らかにしておく。

比較対象として選択した歌曲は、シューベルト Franz Peter Schubert (1797-1828) の歌曲《魔王 Erlkönig》、グリーンカ Михаил Иванович Глинка (1804-1857) の歌曲《アデーリ アдель》、ダルゴムイーシスキイ Александр Сергеевич Даргомыжский (1813-1869) の歌曲《私はまだ彼を愛する Я всё ещё его люблю!》、チャイコフスキイ Пётр Ильич Чайковский (1840-1893) の歌曲《ドン・ファンのセレナーデ Серенада Дон-Жуана》と《さわがしい舞踏会で Среди шумного бала…》の計5曲¹⁾である。

このうち、シューベルトの歌曲《魔王》はドイツ・

リート¹の代表として選択した。19世紀以降の歌曲に多大な影響を与えていたドイツ・リートを比較対象として挙げることで、デクラメーション様式を使用していない一般的な歌曲と朗読との関係を明らかにすることを目的としている。

それ以外のロシア歌曲4曲は、ロシア語に旋律をつける上での特徴を明らかにするために選択した。その中でもグリーンカ、ダルゴムィーシスキイ、チャイコフスキイという3人の作曲家を取り上げているのは、ムーソルグスキイと同時代の作曲家のうち、ロシアクラシック音楽の基礎となる歌曲、ムーソルグスキイが規範とした歌曲、ムーソルグスキイとは対照的な歌曲の特徴をそれぞれ個別に明らかにするためである²⁾。

1) 音高における分析

朗読と歌曲を比較するには、まず朗読のサンプルが必要である。《魔王》の歌詞の朗読については、歌詞の原詩であるゲーテ Johann Wolfgang von Goethe (1749-1832) の詩を朗読したCD³⁾を使用した。それを標準的なドイツ語の話し言葉と考え、歌曲と比較する。そして、ロシア語による歌詞の朗読サンプルの採取には、広島大学総合科学部でロシア語の授業を担当しているトルストグゾフ Сергей Толстогузов 先生にご協力いただいた。ロシア語の標準語はモスクワ方言だが⁴⁾、トルストグゾフ先生の使用するロシア語もその標準語であり、ロシア語の話し言葉のサンプルとして信頼性が高いものと判断した。

比較の方法だが、朗読はCD、採取したトルストグゾフ先生の朗読の音声を生声解析ソフト〈マルチスピーチ3700〉にかけて音高の判定を行った。判定する際、歌曲で1音⁵⁾が当てはめられている音節を最小の単位と考え、その部分の音高の平均値を算出した。音高

は $a^1=440$ ヘルツの設定で採取し、セントに変換する際は 220 ヘルツ $=0$ セントという設定にした。朗読をヘルツからセントへ変換する際に使用した式は“ $1200 \times \log_2 (X/220)$ ”である。歌曲については楽譜に記載されている音高をそのままセントへ置き換えた ($a^1=440$ ヘルツ $=1200$ セント)。

セントに変換した数値をグラフで示すと以下のようになる(図1)。

このグラフを用いながら、音高関係の一致度について考察する。

音高関係が朗読と歌曲で一致しているかどうかは、歌曲と朗読のそれぞれの上がり下がり⁶⁾が単純に一致しているかそうでないかで判断した。ただし、朗読に関してはセントの幅が12平均律上の半音に当たる100未満であれば同じ音程と判断することとした。

音高関係を調べるにあたってもうひとつ考慮したのは意味の切れ目である。意味が切れている部分の音高関係が一致している必要はないので、その部分は集計に含めない形で計算した。その意味の切れ目は、多くの場合コンマやピリオドを参考にして判断した。したがって図1でも意味の切れ目と判断した箇所⁷⁾で折れ線グラフを分離して表示してある。

以上のような方法で比較対象とした歌曲すべてを分析した結果、次のような結果が得られた(表1)。

表1にある「音高が取れなかった箇所」というのは、基本的には子音の発音部分をマルチスピーチが読み取らず音高が採取できなかった部分を指している。また、歌曲において1音節⁸⁾に対して複数音が当てはめられている箇所でも(メリスマ様式)、朗読では1音節内で音高が大きく上下することはあまりないため、歌曲での1音に対する音高が取れないことになる。それも「音

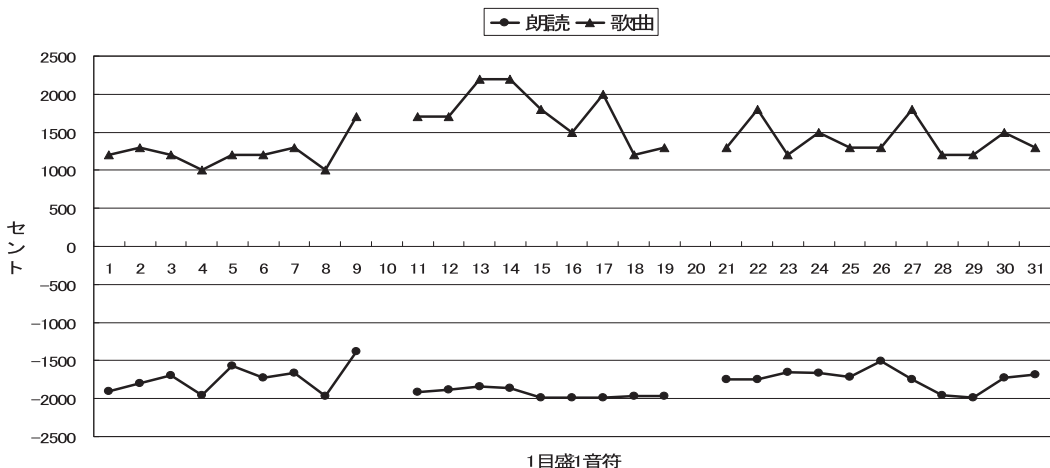


図1 《魔王》セント変換グラフの1部

表1 比較対象とした歌曲の音高の分析結果

作曲者	歌曲名	作詞者	音高関係の一致度	
			音高が取れなかった箇所を一致と考えた場合	音高が取れなかった箇所を不一致と考えた場合
F.シューベルト	魔王	J. G. ゲーテ	34%	29%
グリーンカ	アデーリ	プーシキン	51%	41%
ダルゴムィーシスキイ	私はまだ彼を愛する	ジャードフスカヤ	51%	43%
チャイコフスキイ	ドン・ファンの子守歌	A. トルストイ	79%	30%
〃	さわがしい舞踏会で	〃	65%	45%

高が取れなかった箇所」に含めた。したがって、基本的には音高が取れなかった箇所を不一致として集計した結果に注目して考察していく。

表1からは、ロシア歌曲に比べて《魔王》の方が若干音高関係の一致度が低いことが分かる。それは音高が取れなかった箇所を一致と考えた場合の結果において、より顕著であるが、音高が取れなかった箇所を不一致だと考えた場合で見るとその差は比較的少なくなる。このように差が出るのはロシア歌曲における「音高が取れなかった箇所」のほとんどが、マルチスピーチが音高を読み取らなかった箇所ではなく、メリスマ様式に起因するものだったからである。その傾向が最も顕著なのはチャイコフスキイの歌曲《ドン・ファンの子守歌》であり、音高が取れなかった箇所を一致とするか不一致とするかでその結果に49ポイントもの差が出ている。しかしメリスマ様式といってもその実態は装飾音などがほとんどであり、ロシア歌曲のどの曲も基本的にはシラビックであった。

《魔王》は通作歌曲形式であるが、ロシア歌曲4曲は、有節歌曲形式とまではいかないものの、最初に提示さ

れた旋律の細部を変更して何度も繰り返すなどの書法が見られた。この理由のひとつとしてロシア詩の特徴を挙げることができる。ロシア詩は韻とリズムをなによりも重視しており、一定のリズム、韻の中でいかによく詩を創作することができるかが詩の評価を左右している。そのようなロシア詩を歌詞として使用するロシア歌曲が、最初の連に対して使用したモチーフを何度も使用するの当然のこととも考えられる。実際の歌曲では原詩を任意に何度も繰り返したりすることも行われており、原詩のリズム感や韻をそのまま再現しようとしていたわけではないようだが、比較対象として取り上げた4曲の歌曲はある程度歌詞に制約されて作曲されていたと言うことは出来るだろう。

続いてそれぞれのセント変換グラフを詳しく見ていくと、ロシア歌曲よりも《魔王》の方が、より歌曲と朗読の抑揚が近い印象を受けた。特にチャイコフスキイの歌曲においては、朗読の抑揚を考慮している印象はまったく感じられなかった。図2はチャイコフスキイの歌曲《さわがしい舞踏会で》のセント変換グラフの一部であるが、それぞれの音高の上がり下がり

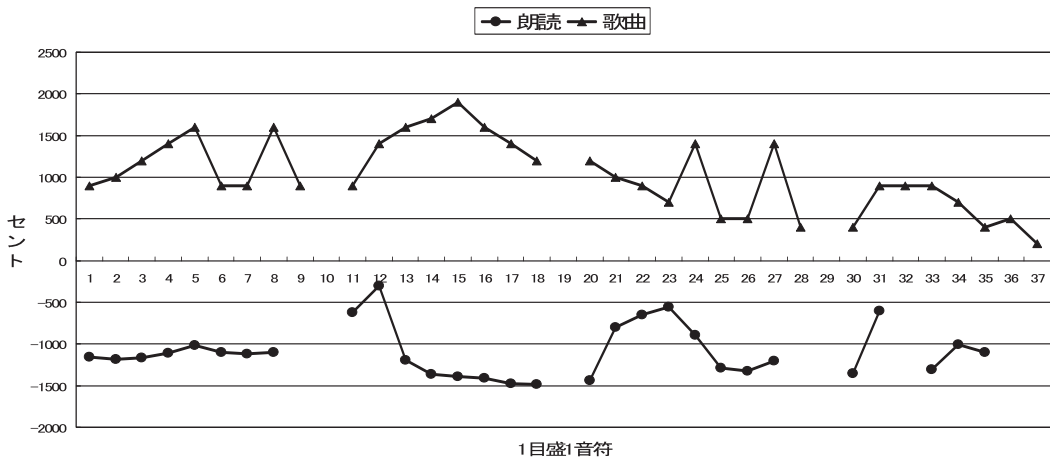


図2 《さわがしい舞踏会で》 セント変換グラフの一部

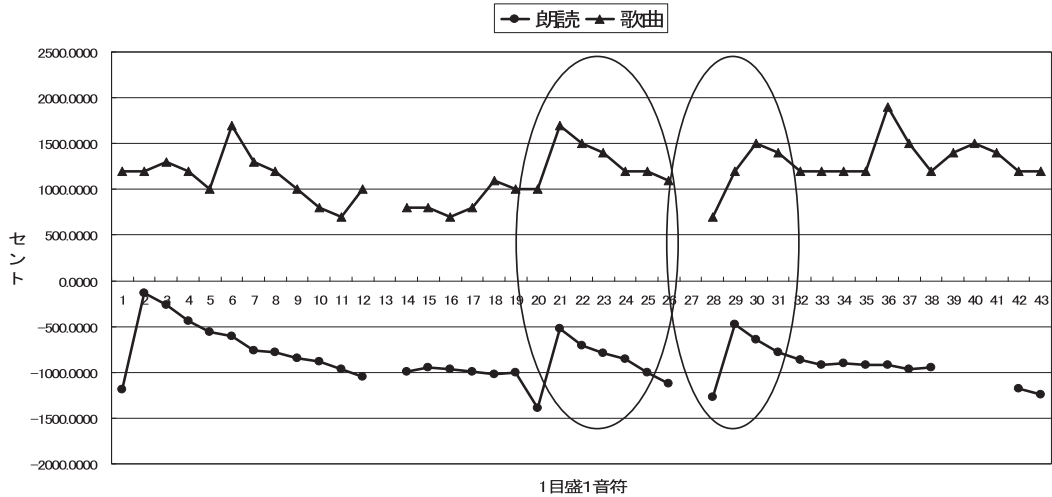


図3 《私はまだ彼を愛する》 セント変換グラフの一部

はほとんど一致していない。

それに比べて、《魔王》(図1)やダルゴミーシスキの歌曲《私はまだ彼を愛する》(図3)では、特徴的に音高が高くなる箇所や、全体的な上がり下がりで見通っている箇所が見られた。

これらの違いは、《魔王》に関しては原詩の特徴に起因するものであろう。《魔王》の歌詞に使用されているゲーテの詩は複数の登場人物が現れ、内容も劇的である。シューベルトも詩の登場人物を意識して音域や調性を曲の中で書き分けている。デクラメーションについては、おそらく意識していなかったであろうが、登場人物を書き分けようという試みの中で多少話し言葉に近い結果が出たのであろう。

一方、《私はまだ彼を愛する》はきちんとしたロシア詩の形式に則った詩を歌詞としており、《魔王》のように登場人物の書き分けという点から特徴が出たのではないと考えられる。図3のような結果が見られたことは、ダルゴミーシスキが多少デクラメーション様式を意識していたことを示しているのではないだろうか。しかし曲全体を見た場合にはこのように一致している箇所は多くはなく、徹底されていたとは言い難い。このダルゴミーシスキの結果に対して、ムソルグスキの歌曲にはどのような特徴が見られるのか、のちに検討したい。

2) リズムにおける分析

リズムに関してはマルチスピーチなどの機械による分析が行えないため、歌曲のリズムと朗読とを照らし合わせながらその一致度を考察していく。

リズムについて考察する上では、アクセントの位置を重視した。ロシア語の単語は原則としていずれかの

音節の母音に必ずアクセントがあり、その音節はほかのものより強く、少し長めに発音する。アクセントの位置で一つの単語の意味が成り立っており、例えば日本語の「て・に・を・は」はアクセントの位置の移動によって表現される場合もある⁵⁾。従ってロシア語においてはアクセントの位置は絶対でありデクラメーションを実現する上で欠かせない要素である。そのため、1. アクセントの付いた母音(アクセント母音)を含むシラブルが強拍に来ているか、と、2. アクセント母音を含むシラブルが単語内の他のシラブルより長音か、という点に注目して分析することとした。

しかしドイツ語においてはその原則が当てはまらない。ロシア語には硬母音と軟母音を合わせて10の母音があるが、ドイツ語の母音は変母音を含めて8つと少し少ない。それに加えてドイツ語には子音のみで発音される箇所が多くあり、ロシア語に比べてシラブルの数が少なくなるのである。そのため、1シラブルで構成されている単語も多く、単語内でアクセントの付いているシラブルと他のシラブルの長短を比較するのが非常に難しい。よってリズムの分析に関しては《魔王》は比較対象としては扱わず、音高関係の分析を行ったロシア人作曲家による歌曲4曲を比較対象として取り扱うこととした。

詳しい分析方法としては、1. アクセント母音を含むシラブルが強拍に来ているか、については、単純にアクセント母音を含むシラブルが強拍に置かれていれば○、そうでなければ×とカウントし、そのパーセンテージを算出した。2. アクセント母音を含むシラブルが単語内の他のシラブルより長音か、については、他のどのシラブルよりも長音であった場合は○、同じ

表2 ロシア歌曲のリズム分析結果

作曲者	歌曲名	作詞者	アクセント母音を含むシラブルが強拍にきているか	アクセント母音を含むシラブルが単語内の他のシラブルより長音か	
				もっとも長い音符が当てはめられていた場合	同じ長さの音符が当てはめられていたものも含めた場合
グリーンカ	アデーリ	プーシキン	44%	33%	97%
ダルゴムィーシスキイ	私はまだ彼を愛する	ジャードフスカヤ	76%	69%	90%
チャイコフスキイ	ドン・ファンンのセレナーデ	A.トルストイ	96%	71%	98%
〃	さわがしい舞踏会で	〃	98%	49%	100%

長さのシラブルがあった場合には△、他により長いシラブルがあった場合には×でカウントした。そしてもっとも長い音符が当てはめられていた場合のパーセンテージと、それに同じ長さの音符が当てはめられていたものも含めた場合のパーセンテージの両方を出すこととした。

以上のような集計方法で算出したグリーンカ、ダルゴムィーシスキイ、チャイコフスキイの歌曲4曲の分析結果は以上の通りである(表2)。

まず「アクセント母音を含むシラブルが強拍にきているか」の項目を見ると、グリーンカの歌曲《アデーリ》以外の3曲についてはみな高い結果が出ている。これはロシア歌曲の特徴と関係がある。ロシア歌曲を歌う際には、1単語につきひとつある長いアクセント母音を、特に十分長く歌わなければならない。それはたとえば同じ8音符の中にあってもやや長く、テヌート気味に歌うのである⁶⁾。これは先に述べたように、ロシア語がアクセントの位置を非常に重要な要素としている言語であるためだと考えられる。そのためロシア歌曲の作曲家は、歌い手が長めに歌いやすいようにもともとアクセント母音を強拍におく傾向があるのである。歌曲《アデーリ》のみ44%と低い結果が出ているが、この曲は2/4拍子で書かれており、2拍目にアクセント母音が置かれていた場合が集計されなかったためである。それも含めるとその数値は97%になり、他の3曲とほとんど変わらない高い結果となる。したがって、アクセントのついたシラブルを強拍に置くことは、デクラメーション様式を追求していたかどうかにかかわらず、ロシア歌曲を作曲する際には共通して配慮されていた点だと言えよう。

続いて「アクセント母音を含むシラブルが単語内のほかのシラブルより長音か」の項目については、「同じ長さの音符が当てはめられていたものも含めた場合」の項目では4曲とも高い数値が出ているが、「もっとも長い音符が当てはめられていた場合」の項目ではばらつきが出ている。高い結果が出ているのは、ダルゴムィーシスキイの《私はまだ彼を愛する》とチャイ

コフスキイの《ドン・ファンンのセレナーデ》の2曲である。しかし2曲とも有節歌曲形式に似た形式で作曲されており、意図的にそれぞれのアクセント母音に音価の長い音符を当てはめているという印象は受けなかった。このように「アクセント母音を含むシラブルが単語内のほかのシラブルより長音か」の項目において高い結果が出たのも、ロシア歌曲の特徴と関係があるのではないかと筆者は考える。

ロシア詩は一定のリズムで朗読できるように作られている。そのリズムとは、ロシア語の特性上、アクセントの位置を一定の場所に置くことで作られる。したがって全ての連で一定の場所にアクセント母音が来ることになるのである。そのため、最初の旋律でアクセント母音の場所に他よりも音価の長い音符を当てはめておけば、それを毎連で繰り返し使用しても必ずアクセント母音に音価の長い音符が当てはまる。このような理由から、ロシア歌曲においてリズムの一致度が高くなったのではないだろうか。

このように、リズム分析の集計結果のみを見ると高い結果が出ていても、実際には詠唱的である可能性もあることを考慮に入れておかなければならない。

以上の結果を踏まえて、ムーソルグスキイの歌曲について分析を行う。

3. ムーソルグスキイの歌曲の分析

1) 音高における分析

ここではムーソルグスキイの歌曲について、比較対象として取り上げた歌曲で行ったのと同じ方法で分析を行う。ここでは『ムソルグスキー歌曲集』⁷⁾の中から10曲を選んで分析を行った。第1期から3曲、第2期から2曲、第3期から5曲の計10曲である。曲は、各年代区分から選択することにまず留意した。その他では、ムーソルグスキイ自身が作詞した歌曲とそうでない歌曲、複数の登場人物が現れるような特徴的な歌詞の歌曲と、独白形式の歌詞の歌曲などがまんべんなく入るように選択した。また、筆者自身が楽譜を見な

表3 音高関係の一致度

歌曲名	作曲年	作詞者	音高関係の一致度	
			音高が取れなかった箇所を一致と考えた場合	音高が取れなかった箇所を不一致と考えた場合
星よ、おまえはどこに？	1857	H. グレーコフ	70%	24%
神学生	1866	M. ムソルグスキー	48%	32%
ドン川のほとりの庭に花咲き	1867	A. コリツォーフ	26%	25%
隅っこで	1870	M. ムソルグスキー	64%	57%
おやすみの前に	1870	〃	60%	58%
壁に囲まれて	1874	A. ゴレニーシチェフ＝ク トゥーゾフ	53%	42%
きみは私に気付かなかった	〃	〃	63%	57%
子守歌	1875	〃	62%	54%
亜麻を紡ぐのは若者の誉れか	1877	A. K. トルストイ	62%	49%
蚤の歌	1879	ゲーテ『ファウスト』より A. ストルゴフシチコフ訳 (笑い声はムソルグスキー の創作)	60%	46%

がら朗読を聴いたときに受けた印象も参考にした。

選択したムソルグスキーの歌曲10曲の音高の一致度は以上の通りである(表3)。

表3では選択したムソルグスキーの歌曲を年代順に並べている。

ムソルグスキーの歌曲の音高を採取した時と、他の作曲家の歌曲の音高を採取した時に筆者が受けた印象の違いを述べると、まずムソルグスキーの歌曲は使用されている音高の種類が多いように感じた。比較対象として取り上げた5曲の歌曲では使用される音高もある程度制限されていたが、ムソルグスキーの歌曲では臨時記号が多く使用されており、同じ音程が連続して使用されるということもあまり見られなかった。また、比較対象としたロシア歌曲4曲のような、有節歌曲形式に近い形式の歌曲もほとんど見られなかった。

ここで音高の取れなかった箇所を不一致とした場合の結果に注目して表1と比較してみると、1870年を境にムソルグスキーの歌曲における音高関係の一致度が他の作曲家よりも上がっていることが分かる。1857-1867年のムソルグスキーの歌曲ではその一致度は他の作曲家の結果よりもむしろ低い。1870年はムソルグスキーの自己形成期にあたる時代であり、ここで歌曲の作曲についてなんらかの転換があったのではないかと推測される。

表3においてもっとも特徴的なのは、1曲目の歌曲《星よ、おまえはどこに？ Где ты, звёздочка?》の、音高が取れなかった箇所を一致と考えた場合と不一致と考えた場合の差である。それ以外の9曲については

その差はほとんどないにも関わらず、《星よ、おまえはどこに？》だけはその差は46ポイントもある。その理由については、《星よ、おまえはどこに？》においてメリスマ様式が非常に多く使用されていることが挙げられる。ムソルグスキーの歌曲は基本的にはシラビックであるが、この曲は例外的で、各所で1音節に対して2~10の音符が当てはめられているのである(譜例1)。このような特徴は、特に彼の中期、後期の作品ではほとんど見られない。《星よ、おまえはどこに？》はムソルグスキーが最初に作曲した歌曲であるので、このような他のムソルグスキーの歌曲には見られない特徴が見られるのであろう。



Где ты звёздочка? Ах, где ты ясна? Иль

譜例1 《星よ、おまえはどこに？》 3~5小節

次に中期の作品に注目すると、前述のとおり、《隅っこで В углу》と《おやすみの前に На сон грядущий》では、初期と比べて数値がかなり高くなっていることが分かる。この2曲は歌曲集〈子供部屋〉の中の曲で、ムソルグスキーが子どもの話し言葉を歌曲にするために自身ですべて作詞し、曲をつけたものである。この頃からムソルグスキーのデクラメーション様式はより確実なものとなっていったのではないだろうか。この中期の2曲は完全にシラビックで書かれているので、音高が取れなかった箇所はすべて子

音が採取できなかった部分である。この点から考えても、この2曲の音高関係はかなり一致しているといっ
てよいだろう。

後期の作品では、《壁に囲まれて В четырёх стенах》と《亜麻を紡ぐのは若者の誉れか Ой, честь ли то молодцу лён прясти?》の2曲が50%を切っているが、それ以外は高い数値を示している。後期の作品もほぼすべてがシラビックで装飾などないことから、デクラメーション様式の追求がなされていると考えられる。加えて、中期と比べて歌詞も作曲者自身による創作ではなく、この時期になんらかの方向転換がなされたのではないかと推測される。筆者が音高を採取した際には、後期の歌曲は中期に比べ、よりメロディックに書かれている印象を受けた。

筆者としては、楽譜を見ながら朗読を聴いた段階では、最後の歌曲《蚕の歌》の音高一致度の数値がもっと高くなるだろうと予想していた。しかし予想に反して、他の曲よりも多少低い数値が出た。なぜ自身の印象とは違う結果が出たのか、続く次項でのリズムの考察と照らし合わせて、その理由を探っていきたい。

2) リズムにおける分析

リズムに関しても分析方法は比較対象とした歌曲と同じである。対象とした歌曲は、音高の分析を行った10曲である。ムーソルグスキイのリズムの分析結果は次の通りになった(表4)。

表4を見て分かるように、ムーソルグスキイの歌曲におけるリズムの一致度はかなり高い。「アクセント母音を含むシラブルが強拍にきているか」という項目では、すべての時期において高い数値が現れている。

しかしこの強拍にアクセント母音を含むシラブルを当てはめる作曲法は先述した通りロシア歌曲において一般的な作曲法であり、表2と比べても著しく高いといえるわけではない。むしろチャイコフスキイの歌曲の方が若干高い数値が出ている。

また、「アクセント母音を含むシラブルが単語内のほかのシラブルより長音か」の項目のうち、「同じ長さの音符が当てはめられていたものも含めた場合」の結果はどの曲でも高い数値が出ている。もっとも低い結果は《亜麻をつむぐのは若者の誉れか》であるが、それでも79%、約8割あるのである。比較対象としたロシア歌曲4曲についてもすべて90%を超えた数値が出ているので、ロシア歌曲全般でアクセントのついたシラブルに他のシラブルより短い音符が当てはめられることはほとんどないだろう。

表4で特徴的な結果が出ているのはまず《隅っこで》である。「アクセント母音を含むシラブルが強拍にきているかどうか」の項目では75%とほかの曲に比べても高くもなく、低くもない数値が出ている。しかし「アクセント母音を含むシラブルが単語内のほかのシラブルより長音か」という項目では、「もっとも長い音符が当てはめられていた場合」の数値がたったの9%である。これは10曲の中で飛びぬけて少ない。それに対して、「同じ長さの音符が当てはめられていたものも含めた場合」では、82%とほかの曲と比べても同等の結果が出ている。これはつまり、曲の大半でアクセントのついたシラブルとそれ以外とはシラブルに同じ長さの音符が当てはめられているということである。しかし《隅っこで》より前の作品、《ドン川のほとりの

表4 リズムの分析結果

歌曲名	作曲年	作詞者	アクセント母音を含むシラブルが強拍にきているか	アクセント母音を含むシラブルが単語内の他のシラブルより長音か	
				もっとも長い音符が当てはめられていた場合	同じ長さの音符が当てはめられていたものも含めた場合
星よ、おまえはどこに?	1857	H. グレーコフ	68%	16%	100%
神学生	1866	M. ムソルグスキー	88%	27%	89%
ドン川のほとりの庭に花咲き	1867	A. コリツォーフ	93%	52%	93%
隅っこで	1870	M. ムソルグスキー	75%	9%	82%
おやすみの前に	1870	〃	68%	24%	97%
壁に囲まれて	1874	A. ゴレニーシチェフ=クトゥーフ	93%	46%	96%
きみは私に気付かなかった	〃	〃	80%	65%	100%
子守歌	1875	〃	77%	60%	96%
亜麻を紡ぐのは若者の誉れか	1877	A. K. トルストイ	76%	32%	79%
蚕の歌	1879	ゲーテ『ファウスト』より A. ストルゴフシチコフ訳 (笑い声はムソルグスキイの創作)	87%	69%	95%

庭に花咲き」では「もっとも長い音符が当てはめられていた場合」の結果は52%であり、10曲全体の中でも低くはない。つまり、アクセントのついたシラブルに長音を当てはめる、という方法を1度試みているにもかかわらず、《隅っこで》では放棄しているのである。

このロシア歌曲全般においても一般的と言えるデクラメーション様式をこの曲でムソルグスキーが放棄した理由のひとつは、《隅っこで》が彼自身による詩を歌詞として採用している点にあると思われる。《隅っこで》では、ロシア語の生きた話し言葉を音楽化できるよう、ムソルグスキー自身が散文の歌詞を書いている。その会話の内容が持つスピード感を生かすために、あえて音価が同じ長さの音符を並べ、音高とアクセントのついたシラブルの位置のみでデクラメーションを実現していたのである⁸⁾。

しかし最後の歌曲《蚤の歌》では、「もっとも長い音符が当てはめられていた場合」と「同じ長さの音符が当てはめられていたものも含めた場合」の両方の結果が高くなっている。つまり曲の大半で、アクセントのついたシラブルにもっとも長い音符が当てはめられているのである。「同じ長さの音符が当てはめられていたものも含めた場合」の結果も95%と高い数値が出ているので、曲中でアクセントのついたシラブルに、ほかのシラブルより短い音符が当てはめられている箇所はほとんどないということである。これが、筆者が《蚤の歌》の楽譜を見ながら朗読を聞いた際に、朗読と歌曲の抑揚がほぼ一致していると感じた要因だったのだろう。ちなみに《蚤の歌》は既存の詩に曲を付けており、散文ではなく韻文である。

これまで見てきた音高関係とリズムの分析結果を照らし合わせてみると、それぞれの数値の推移はあまり一致していない。音高関係の一致度では、数値は年代が後半に行くにつれ高くなっていく傾向を見せたが、リズムにおいてはそのような結果は見られない。むしろ自身で作詞した曲においては、「もっとも長い音符が当てはめられていた場合」の結果が低くなっている。つまり、音高とリズムでは、デクラメーション様式の追求の仕方が異なっていたのではないかと考えられる。そしてそこには、歌詞が韻文のものか散文のものかということも大きくかかわっていると考えられる。

この考察を踏まえて、今後、プーシキンの原作の言葉を生かしつつムソルグスキーが各所に手を加えているオペラ《ボリス・ゴドゥノフ Борис Годунов》ではどのようなデクラメーション様式を使用しているのか明らかにしていきたい。

【注及び参考文献】

- 1) 比較対象とした歌曲5曲は、それぞれ以下の楽譜を参考にした。
 - ・バッハ他 畑中良輔編『ドイツ歌曲集1 原調版』全音楽譜出版社 1982
 - ・グリンカ他 小野光子編『ロシア歌曲集』全音楽譜出版社 1985
 - ・チャイコフスキー 小野光子編『チャイコフスキー歌曲集』全音楽譜出版社 2000
- 2) グリーンカはロシアにおける芸術音楽の創始者ともいえる人物で、《アデーリ》はロシア歌曲の基礎としてここで取り上げている。ダルゴムィーシスキイは、ムソルグスキーにとって歌曲の目標とも言える人物である。《私はまだ彼を愛する》はダルゴムィーシスキイの叙情的な代表作として知られている。チャイコフスキーは、五人組とは対象に位置する作曲家と評されることが多い。チャイコフスキーは生涯にわたって130曲を超える歌曲を作曲しており、彼の歌曲はロシア歌曲の中に主要な位置を占めている。しかしムソルグスキーとはその音楽観の違いから互いに批判しあうこともあり、ムソルグスキーの追及していたデクラメーションを批判した手紙も残っている。したがってここではチャイコフスキーの歌曲をムソルグスキーとは正反対の性質を持つ歌曲として提示する。今回は、チャイコフスキーの最も充実した1878年の歌曲集 Op.38の中から、《ドン・ファンのセレナーデ》と《さわがしい舞踏会で》を取り上げた。
- 3) Goethe, Johann Wolfgang, et al. *Die schönsten deutschen Balladen*. Bach, Dirk, et al. Patmos Verlag GmbH & Co. 3-491-91149-4 (CD), CD 1, track 1.
- 4) 新村出編『広辞苑 第4版』岩波書店 1994
- 5) ショスタコービッチ 小林久枝編『ショスタコービッチ歌曲集1』全音楽譜出版社 1991 p.221
- 6) グリンカ他 小野光子編『ロシア歌曲集』全音楽譜出版社 1985 p.5
- 7) ムソルグスキー 岸本力編『ムソルグスキー歌曲集』全音楽譜出版社 1995
- 8) 菊池可奈子「ムソルグスキーの朗唱法研究—歌曲《隅っこで》に注目して—」『広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学研究紀要』第20号 2008 pp.187-196

(主任指導教員 千葉潤之介)